

戦争について

Junko Higasa

1.732 ...ルート 3 ではないけれど「人並みに生きたい」そこから人間社会の戦いは始まる。他人が持っているから自分も持ちたい。順当に手に入れば問題ないが、その手段がないと獲得するための方法を選ばなくなる。手に入れる。すると今度は他人が新しく生まれた文明の利益を獲得する。悔しい。そこから「人並み以上に」の戦いが始まる。際限がない。人間の欲は、馬の前にぶら下がった人參のように、目の前をこれ見よがしに通り返っていく文明の楽を追い続ける。走り続けると息が切れる。『蜘蛛の糸』ではないが追いつかれないように走るより、他人を蹴散らした方が早い。この欲得の要素を内包するのが文明社会だ。他人がいるから競争が生まれる。良くも悪くも競争のエネルギーで進んで行くのが人間社会だ。愛を持って世の中を眺める競争であれば世は明るく発展するだろう。しかし愛を忘れて欲に支配された競争であれば、やがて欲と無関係の人々まで巻き込んだ無益な戦争になるだろう。結局戦争は一部の者の権利拡大の欲望から始まる。地球には資源が眠っている。けれどそこにはその資源を活用しない者たちが住んでいる。もったいない。あれを使えばもっと楽ができるのに。このルートが開ければ今よりもっと儲かるのに。儲けて何故悪い。いや、儲けていただくのは結構。他人の平和さえ侵食しなければ。ところが我欲の塊は平和の民をどかしてまでも得を手に入れようとする。世が乱れる。それならば戦わずに貧乏を失くすように皆で一律に分け合ひましょう。しかしそれも都合が悪い。低きに合わせれば全員浮上より全員沈没の可能性が高いから。かくしてどちらに転んでもより多くの利益を得ようと思う人間の欲は、元手まで滅失する経済困窮に苦しむのである。

『吾輩は猫である』の猫が、どんなに臆病でも「自分だって猫だから、台所を荒らすネズミを捕るぞ」と決心するが、これは自分だって日本の民であるから、日本を圧迫するものとは戦わざるを得ないということである。かくして『草枕』の鉄車は「限られた生命の権利」を無効にして、人間を荷物のように積んで戦地へと運ぶのである。

満開の桜が散り始めた季節に靖国神社の資料館へ入ってみたことがある。中には特攻隊員が家族へ宛てた手紙がたくさんあった。何に驚いたかといつて、今まで育ててくれた親への感謝の言葉に驚いた。生きていて何が楽しかったが綴られた手紙に涙した。文字の美しさと文章の流麗さに愕然とした。日本はこのような正しく明るい未来を開くであろう優秀な人を殺して馬鹿ばかり世の中に残してしまったのではないかと。ああ、もったいない。『草枕』の若い久一さんもその中の一人であったろう。

『草枕』の中に描かれたもの。至高の美を語った「藝術論」も、現世を語った「文明社会への批判」も、恋愛・結婚における「男女の在り方」も結局全部「愛」へ導く。

『草枕』が発表されたのは 1906 年 9 月。日露戦争の終結が 1905 年 9 月。久一さんが最後の徴兵だとして、文中に描かれている「春風」「椿」を採り上げれば小説の背景は 1905 年春。その日露戦争終結前後に社会主義者「幸徳秋水」が入獄・出獄している。また執筆時期には南満州鉄道（1906.11 設立）の他国との利権争いもある。国内の鉄道は 1906 年 3 月に国有化した。漱石は人を遠くまで運ぶ便利な文明が、平和の民に愛の流通を与えたと同時に、欲による圧迫の流通も容易にしたことを警告する。(2013.4.17)